

富士山あれこれ

山頂の鐘(前)



■図1「大日本富士山絶頂之図」(部分)

はじめに

富士山の頂上に、かつて釣鐘があったことをご存知でしょうか。五雲亭貞秀筆の錦絵「大日本富士山絶頂之図」(安政4年・1857)は、富士山の絶頂(頂上)を描いたもので、美術品としての価値のほかに、道者(富士講などの信仰登山者)の姿やさまざまな宗教施設など、当時の山頂の様子を知ることのできる貴重な資料として知られています。その画面の中の「北口 吉田拝所」と記された場所に「拝所鳥居」が描かれ、そばには「拝所打ならし」と称する鳥居状の枠に懸けられた鐘と、それを打つための撞木が小さく描かれています(図1)。この鐘は、いったい何なのでしょう。

1 山頂の拝所

江戸時代、富士山の登山道は、よく知られるものとして4筋が存在しました。甲斐側が吉田口、駿河側が須走口・須山口・大宮村山口で、各登山口から登り上げた頂上には、それぞれ吉田須走拝所、須山拝所、村山拝所がありました。吉田須走拝所が同じ場所なのは、吉田口と須走口の登山道が八合目の大行合で合流し、その先は一本の道となり頂上へ至るからです。頂上の鐘の説明の前に、まずこの「拝所」についてみてみましょう。

『富士山真景之図』(弘化4年・1847)に「薬師ヶ嶽より左に巡りて吉田須走より登山の者拝所有り 空洞ナル内院ヲ仙元大菩薩ト観シテ拝スルナリト云」と

あります(※1)。

この薬師ヶ嶽というのは、吉田口須走口の頂上にある峰で、そこを左に進んだ先に拝所がありました。そして万延元年(1860)の『富士山道知留辺』に「内院 不二山中央にある所の空坎をいふ 徑り十三町深さ一合五勺 是より忽ち雲を生じ忽風を生ず 又是を浅間大菩薩と称して拝する 諸人賽銭を坎中に投入る、」吉田須走拝所 内院の前にあり この所を初穂打場といふ」と記されています(※2)。また、天保5年(1834)の『駿河国新風土記』には「頂上ナル八葉内院ト称セル洞穴、コレ富士浅間大神ノ御座所」とあります(※3)。

「内院」とは噴火口のことで、そこは富士山の本尊である浅間(仙元)大菩薩・富士浅間大神の御座所と考えられており、「拝所」は、富士山の頂上に到達した道者が内院を拝する場所のことでした。拝所には鳥居が建てられ、鳥居を通して拝したのです。そして内院散銭といって、噴火口に賽銭を投げ入れる「初穂打場」もこの場所にありました。先ほどみた「大日本富士山絶頂之図」(図1)には、拝所鳥居の前で内院を伏拝している数人の道者と、その脇で二人の道者が紙ひねりにした賽銭を噴火口に投げ入れている様子が描かれています。

富士山あれこれ

山頂の鐘(前)

2 鐘のある場所

『駿河国新風土記』に、「八合目ヨリ上ニハ、休ムベキ窟モナクテ、イトワビシ。上ノ方ニ鐘ノ音ス。コハ登リハテタル所ニ半鐘アリテ、ツクナリト聞テ、ウレシクテ、ツトメ登レバ、ソノ所ニイタリケル。頂ニ木ノ鳥居アリ。此鳥居ハ庵原郡岩淵村ナル講中ト云モノ、建シナリトゾ。其所ニ鐘ハアリケリ。」とあります。大宮村山口登山道の八合目の先を登っていると、頂上の方から半鐘の音が聞こえてきて、その半鐘は頂上の木製の鳥居のそばにあるとあり、吉田口・須走口だけでなく大宮村山口の頂上にも鐘があったことがわかります。今日ではまったく想像ができませんが、富士山頂の虚空には半鐘の音があちこちから常時鳴り響いていたのです。

天保末から弘化にかけて成立した『富士山明細図』(※4)には、吉田口登山道七合五勺の烏帽子岩及び頂上に鐘が描かれています。頂上の鐘は表題が「胸

突」(図2)、「同(頂上薬師ヶ嶽役場)」(図3)そして無表題の次頁(図4)の、あわせて3図に同一箇所の鐘が描かれています。このうち、図3では題箋に「初(穂)打場所」、図4では「影拝所」と記されています。「胸突」と呼ばれる頂上直下の場所から望んだ光景を描いた図2では、実際には見えるはずがないものの、山頂の鐘の存在を強く意識させることを意図したものでしょうか、なにもない頂上にただ一つぽつんと描かれた鐘はとても印象的です。

先に紹介した『富士山真景之図』にも同様の図があり(図5)、また『富士山道知留辺』では「吉田須走ハイ所」に鐘らしきものが小さく描かれています(図6)。

このように、江戸時代末期の絵図などには当たり前のように鐘が描かれており、登山期の富士山内では道者の打つ鐘の音が絶え間なく鳴り響いていたことが想像されます。

3 山頂の峰々

富士山頂の噴火口の周囲の峰々を蓮の花の八枚の花弁にみたて、「八葉」と称していました。蓮の花は仏が坐す台座であり、仏教にとってはたいへん貴い花とされていました。富士山頂の峰を八葉と呼ぶことがいつから始まったかは明らかではありませんが、文永年中(1264～1275)の『万葉集註釈』に「いたゞきに八葉の嶺あり」とあることから、鎌倉時代まで遡ることができるようです(※5)。

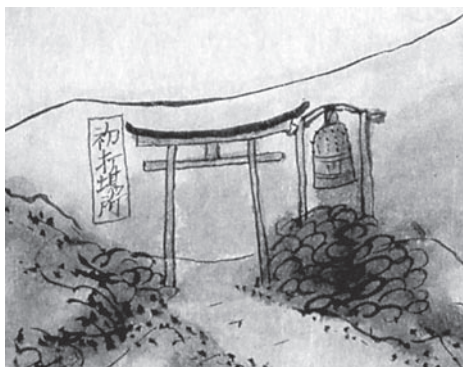
文化11年(1814)成立の『甲斐国志』には、頂上の説明で「回リノ峯ヲ八葉ト云ヒ空坎ヲ内院ト云フ 高低ノ八峯ヲ八葉ノ蓮花ニタトヘ八葉ニ各々仏号ヲ配当セリ」(※6)とあるように、山頂の八葉の峰にはそれぞれに仏の名が冠されていました。

吉田口の真宗寺院である正福寺から摺り出された「八葉九尊図」(延宝8年・1680)(※7)は、吉田口にとって八葉の仏名を示

した数少ない資料の一つであり、山頂に両部の大日を中心として薬師・観音・勢至・地藏・阿弥陀・文殊・釈迦・普賢の名が記されています(図7)。八葉九尊というのは、本来、密教の胎藏界曼荼羅の中央にある中台八葉院に配された九尊の仏を示すのですが、富士山の噴火口とその周囲にめぐる峰々の配置がまさに八葉蓮華を連想するものであったためか、山頂には中台八葉院になぞられて仏名が配されていました。富士山の信仰が密教の影響を受けていた一つの証といえます。現在でも行なわれている「オハチ巡り」は、本来これら八葉に象徴される峰々を巡拝することとされています。『勝山記』の大永2年(1522)の条に「武田(信虎)殿富士参詣有之。八要(葉)メサル、也」(※8)とあり、その風習は戦国時代にはすでに行われていたことがわかります。



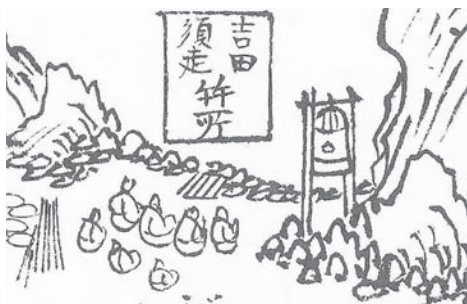
■図2 「富士山明細図」胸突(部分)



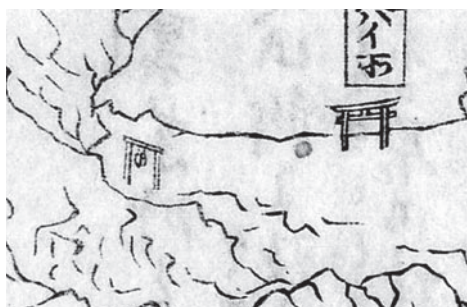
■図3 「富士山明細図」(頂上薬師ヶ嶽役場「初打場所」)(部分)



■図4 「富士山明細図」(無表題)「影拝所」(部分)



■図5 「富士山真景之図」吉田須走拝所(部分)



■図6 「富士山道知留辺」吉田須走ハイ所(部分)



■図7 「八葉九尊図」(山頂の部分)



■図8 富士山牛玉

4 阿弥陀の来迎

山頂の噴火口は浅間大菩薩や浅間大神の御座所である内院であり、その周囲は八葉九尊の仏がまつられた峰々でした。このように山頂は神仏の世界であったためか、山頂ではまれに阿弥陀如来の来迎を目撃することができました。来迎とは、人の死に臨んで、極楽浄土へ導くため阿弥陀如来が諸菩薩を伴い、紫雲に乗って迎えに来ることをいいますが、富士山では山頂に立った人の背後から太陽の光がさしこみ、影の側にある雲や霧によって光が散乱され、自分の影の周りに仏の後光のように光の輪となって現れるブロッケン現象を、極楽浄土からお迎えに来た阿弥陀如来ととらえたのです。

『駿河国新風土記』には「登山シテ窟ニ入テ休ミタルニ、人々御来迎ヲ拝ムト云サハグニヨリテ、我モ拝セント立出テ、東ノ方ヲ見レバ、ソノ方ニハアラストテ、西ノ方ヲカヘリミレバ、八葉内院ヨリ立登ル雲霧ノ中ニ、アリ―ト仏ノ形チアリ。何レノ仏ノ像トモ分チガタシ。ヨク思ヘバ、内院ノ傍、又ハサイノ川原ナド云所ニ、イクラモ立タル銅像アリ。ソレニ日光ノウツリテ、雲ニ映ゼシナラント云リ。(中略)渡辺長蔵ト云ルモノ、モトニ宿リ、富士浅間ノ宮ニ詣シ時、長蔵ノ話ニ、富士禪定ノ人、来迎ト云事ヲ拝ム。長蔵モミタリシガ、是レハ其見ル人ノカゲナリト云」とあります。山頂で阿弥陀の来迎が現れるのはまれなことで、当時、それを拝むことができるのは、たいへんありがたいこととされていました。それとともに、一方では自然現象であるとの認識もあったようです。

江戸時代、富士山の麓の御師

や寺院では、いわゆる「富士山牛玉」を木版で摺り、信仰者に対して盛んに頒布していました(図8)。富士山牛玉は、富士山の頂上に阿弥陀三尊が来迎する様を描いた絵札です。これは富士山頂が阿弥陀の来迎の地、さらには極楽浄土そのものであることを示したもので、この絵札からは富士山の信仰が浄土信仰と密接に結びついていることを知ることができます。これらは掛軸に仕立てて礼拝の対象となったり、あるいは道者の着用する行衣の背に摺られたりしました。

目にみえない神仏が人の前に来臨することを「影向(ようごう)」といいます。図4に「影拝所」とあり、この場合の「影」は山頂に来迎する阿弥陀が実は自らの影で、それを拝むことからの命名と考えられますが、さらにいえば、これは、離れた所から神仏を拝する場所を意味する「遥拝所」と同じ読みで「ようはいしょ」と読むのではないかと思います。つまり、ここは内院拝所であるとともに、阿弥陀の来迎を拝する場所でもあったのです。

(次号につづく)

〈註〉

- ※1 『富士山真景之図』弘化4年(1847)『富士吉田市史』史料編第5巻 平成9年(1997)所収]
- ※2 『富士山道知留辺』万延元年(1860)『富士吉田市史』史料編第5巻 所収]
- ※3 『駿河国新風土記』天保5年(1834)『浅間神社史料』官幣大社浅間神社社務所 昭和49年(1974)所収]
- ※4 『富士山明細図』富士吉田市歴史民俗博物館企画展図録 平成9年(1997)
- ※5 『万葉集註釈』(1264~1275)『富士の歴史』官幣大社浅間神社社務所 昭和48年(1973)所収]
- ※6 『甲斐国志』(巻35山川部)文化11年(1814)『大日本地誌大系47甲斐国志』昭和43年(1968)]
- ※7 『八葉九尊図』延宝8年(1680)正福寺蔵板『富士の神仏』富士吉田市歴史民俗博物館企画展図録 平成20年(2008)所収]
- ※8 『勝山記』『富士吉田市史』史料編第2巻 平成4年(1992)所収]

(奥脇 和男)

みろくどう 身禄堂の由来と変遷(後)

ごしんぜん やまもとこう
—田辺家の御神前から山元講の身禄堂へ—

身禄堂と田辺家

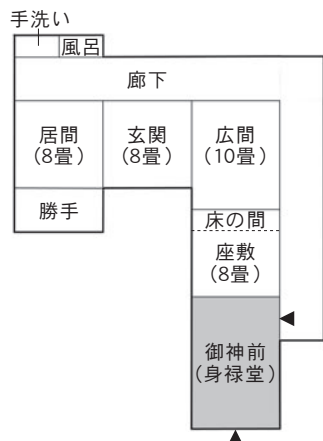
身禄堂は、MARUBI No.35 で述べたように、田辺家と山元講の両方で信心されてきた歴史があります。まず、田辺家の御神前としての面を、Hさんの話によりみていきます。移転前の身禄堂のことを、家族は「ゴシンゼン」(以下、御神前)と呼び、「身禄堂」とは言いませんでした。御神前とは、先述したように各御師の家にある部屋ですが、田辺家の御神前は身禄堂であったということです。では、当時の身禄堂は、どのように利用されてきたのでしょうか。まず、第2期ですが、身禄堂は主屋と一体ではありますが、壁で隔てられており、前述した別棟

の御神前に近いものでした(図1)。入口は表通りへ向け、出入りは表からと主屋の廊下伝いに裏からできました。講社が宿泊するのは、身禄堂裏手の2部屋でしたが、この部屋は講社のみが使い、夏以外は閉めていました。講社の人は、到着すると玄関へ座って盥の水で足を洗ってから家へ上がります。また、講社の先達による拝みは身禄堂で行い、宿泊しない第3期になっても、講社は身禄堂へ拝みにきましたが、身禄堂移転後には、ほとんど訪れなくなります。なお、身禄の遺物は、身禄堂に大切に保管されており、毎年6月には虫干しをしていました。

身禄堂と山元講

次に、山元講の身禄堂としての面をみていきます。まず、山元講の歴史ですが、田辺家の講社の先達が、田辺家の番頭を務めたW氏へ身禄直筆と伝わる「お伝え」(富士講の教典)を譲ったのが、講結成のきっかけであったと伝わります(※1)。その「お伝え」に明治5年の銘があるため、少なくとも明治初年までその結成は遡るようです。二代目先達はO氏、三代目先達はW氏の孫で、講元は、戦前は、T氏、O氏、戦後は、S氏でした(※2)。S氏が講元の時は、講道具は身禄堂に置いてありましたが、法会はS氏の家で行い

ました。身禄堂の移転後は、田辺英一氏が講元となり、これ以後、法会も身禄堂で行うようになります(※3)。なお、昭和24年の記録(※4)では、英一氏が御法会講の世話人になっていることから、講元になる以前も、田辺家と山元講は密接な関係にあり、それは、初代先達のW氏以来変えることはなかったのでしょう。その後、昭和から平成になり、講の後継者もなく法会を続けるのが難しくなると、三代目先達W氏は、長谷川角行の法灯を継ぐ御法家富士教に協力を求め、法会は途絶えることなく続けられました。



■ 図1 田辺家平面図(第2期)



■ 身禄遺物と木箱

身禄堂の由来と変遷(後)－田辺家の御神前から山元講の身禄堂へ－

御神前から身禄堂へ

上述のように、身禄堂は、田辺家の御神前から山元講の身禄堂へと、時とともにその性格を大きく変えています。したがって、田辺家の御神前が、「身禄堂」と呼ばれるようになったのは、山元講の御法会講が行われるよう

になって以後の可能性もあります(※5)。ただ、田辺家が、身禄の直弟子の家筋で、身禄の遺物を大切に守り伝えていることは、周知の事実であり、また、先述したように、身禄の遠忌を主催したことも分かっています。

このように身禄と縁深い田辺家の「御神前」が、周囲からは「身禄堂」とみられることは、全く不自然ではなく、英一氏が講元となる以前から、「身禄堂」と呼称されていた可能性は十分にあるでしょう。また、このことが、

同じように食行身禄を祀りながらも、「身禄堂」と認識されることはなかった他の御師の御神前とは、大きく異なる点です。逆にいえば、他の御師も田辺家と同じく、それぞれが重視している神仏や行者像を祀っているのであり、同じ御神前といってもその内実は千差万別です(※6)。今回の身禄堂調査をとおして、そうした多種多様な御神前的一端が、明らかになったといえます。

現在、田辺家の御神前と山元講の身禄堂という2つの性格を併せ持つようになった身禄堂内には、田辺家の講社と山元講それぞれが奉納した講道具と食膳具が混在しています。中でも、食行身禄の遺物を取りめる木箱の中に、山元講の講道具がしまわれているのは、こうした身禄堂の歩みを如実に示しているといえるでしょう。

最後に、調査にご協力いただいた田辺家と山元講の関係者の皆様、古文書の解説について多大なご協力をいただいた菊池邦彦氏、そして、建造物調査の引用をご快諾いただいた県教育委員会と北川洋氏へ感謝申し上げます。

〈註〉

- ※1 久野千鶴子1989「上吉田の富士講」『上吉田の民俗』
- ※2 同上
- ※3 昭和43年1月吉日「御法会講日待連名簿」(身禄堂内の古文書)の、昭和45年2月26日付けの臨時御法会講の記録に、講元にS氏の名が記されているため、身禄堂移転前までは、講元はS氏であったと考えられます。
- ※4 『(山)元講社宝物台帳及連名』個人蔵
- ※5 移転前の名称は、次の事例があります。大正10年「大田辺神前工寄進」(MARUBI No.35 註12文書の裏書)・昭和7年「元祖神殿」(身禄堂内の奉納額)・「田辺英一郎御神前」(MARUBI No.35 註7の写真説明文中)
- ※6 久野俊彦1989「御師と講社」『上吉田の民俗』

(篠原 武)



■昭和初期の表通り(左手石垣が田辺家の間口・第2～3期)



■身禄遺物の木箱

富士山御師外川家に泊まった人々(中)

—『富士の道の記』の紹介—

菊池 邦彦(外川家調査員／東京都立航空工業高等専門学校教授)

(前号から)

翌天保14年(1843)7月13日〔太陽暦8月8日〕、一行は早朝に起き、外川家の庭の滝でみそぎをして、浅間神社に参拝、それから御胎内を訪れます。まず、上吉田村の浅間神社に至るまでの部分を読んでみましょう。



■ヤーナガワ

登山の朝【史料3】

翌13日の早朝は、宵からのしよぼ〜雨がまだ続いていましたが、夜明けに近い頃になると、鶉の声で目が覚めました。〔寢床から〕起出して、屋敷内の〔外川家の中門を入ったところにヤーナガワという小さな川が今も涼しげに流れています。この流れは上吉田の上宿から御師の屋敷を貫通して流れており、その川の小さな段差の〕瀧で身を清め、〔離座敷の「御神前の間」でしょうか〕諸神・諸

仏を拝して座に着くと、さっそく〔家人が〕お勝手から持ってきてくれた〔熱い〕煎茶が出されます。それを呑みながら、

登り来つ 富士の裾野の
吉田なる 鶉の声に 覚る一夢

と詠むうちに、もう朝飯が用意されていて、各自お膳に向かいます〔この時代は銘々膳でしたから、1人1人にお膳がついたのです〕。

食べ終わると、すぐに登山の

仕度です。私はあちこちにたくさん印判の押してある行衣〔白装束の行衣には、浅間神社や山小屋などで印判を押して貰ったり、先達に書いて貰った布を貼り付けたり、ベテランほどそれらが多く押されていて、その道者の登山歴などが分かります〕に着替えましたが、佐野の五人はそのままの衣類です。ただし、彼らは雨具をそれぞれ用意しています。私は笠ひとつのみなので、〔雨用に〕ゴザを一枚買いました。まだ小雨が降っていましたが、「これくらいが丁度心地よい道程だ」と、〔御師外川家への〕挨拶もそこそこに、荷物は強ちに任せて、私たちは出発しました。

行く道すがら、私は愛用の瓢箪に焼酎を仕込み、佐野の五人は御山のお水を貰おうと小徳利などを用意しています。吉田の町を上がりきり、弓手(左)に真っ直ぐ〔鋸形になった横町を〕行くと、浅間神社〔北口本宮富士浅間神社〕があります。

吉田なる 鶉の声に 覚る一夢
といへるうち、朝飯出来て持ち出す膳に向ひて喰し終り、いざや登山の仕度せんと、我ハ行衣に印判のそこ、有を着かへ、外の五人ハ其俣乃衣類にこそあれど、雨具ハ夫々用意して、我こそ笠ひとつのみなりせば、ござ一枚求めつゝ、小雨に程よき道ならんと、暇々ハそこ、荷物ハ強ちに打まかせ立出れば、行すがら、我ハ瓢に焼酎仕込、五人ハ御山の御水を乞んと小徳利など用意して、吉田を出ぬけ、弓手へよぎり、直に行、

明けバ十三日の朝まだき、宵よりつゞくしよぼ〜雨、はや東雲に近からん、鶉の声に一睡の夢もさめつゝ、起出て、家の表の流れ瀧に浴して身を清め、諸仏神を拝し、座に付バ、はや勝手よりくミ出せん茶吞つゝも、

登り来つ 富士の裾野の

■史料3

社影にもミちしてけり
と詠つゝ、夫より本社北諏訪明神の脇より二、三丁行ぬれハ、兼て頼ミシ六足の女馬に人々乗揃へ、小雨しよぼ〜薄野や井木の小道小一里行ば御胎内へ乃別れミち、「是より馬の行べき道にあらねバ、廻りて出る道へ馬ハ待申さん」といふにまかせて、馬より下り、雨さへはれて、雨の具ハ馬士に預け別れつゝ、五、六丁行ハ、からほりへくだり、是を又登り、茶屋にて一ぶくいき休らへ、持てる品々爰に預け、黒ぼくのごとくなる焼酎石道を七、八丁角立石原つまづきせせ、青くたる山の際へ出れハ、

笠木の先に 望む富士かね
といへつゝくだり行、弓手の方の手水鉢ハ壺間余り、横式間程の大石也、爰にて口すゞぎして本社を拝せバ、神酒も出、又登山安全の御祓まで、社人の出て祝詞をあげ、尊き事、又ありかたし、そちこち御社乃補理を拝せバ、いづくも朱をもて塗りしなれば、赤くとして眼ばゆく、其結好いわんかたなし、

浅間宮の大門口入れバ、両側一二丁か其間右と左りの石燈籠ハすきせあらせず建井び、山門入れバ大鳥井、廻してミれば三尋ありて、外に又なき鳥居なり、三国第一山の額ハ一品純如法親王御筆とかや、文字太に書たるをしばし拝して、

三国の 一の鳥居を詠(眺)むれハ

■史料4

富士山御師外川家に泊まった人々(中) - 『富士の道の記』の紹介 -

浅間神社境内から御胎内へ【史料 4】

浅間神社の大門を入ると、参道の両側1、2丁〔1丁は109メートルくらいです〕の間に、左右に隙間無く石燈籠が立ち並んでいます〔これらは、享保20年(1735)から元文5年(1740)の庚申縁年を挟んで宝暦6年(1756)迄、江戸小伝馬町の豪商村上光清が中心となり、「村上光清同行」衆中が寄進したもので、現在も約300年の星霜を経て立ち続けています(富士吉田市史編纂室『上吉田の石造物』1991年)〕。

山門を入ると大鳥居が聳えています。一廻りしてみると3尋(約5.4メートル。大人が両手を広げた幅が1尋=約1.8メートルです)もあって、他に比較できないほど立派な鳥居です。

ここにかかる「三国第一山」の額は、一品純如法親王の染筆といわれています、〔力強く〕文字太に書かれているのをしばし拝見し、

三国の 一の鳥居を眺むれば
笠木の先に 望む富士かね

と詠みつつ、弓手の方にある手水鉢は〔縦〕1間余り・横2間程の大石です。ここで口などをすすいで本社〔本殿〕を拝見すると、御神酒が出ますし、社



■大鳥居

人が出てきて登山安全の祝詞をあげてくれます。尊いこと、また、有り難いことです。

境内の諸社を拝見しますと、いずれも朱塗りで赤々として〔照り輝き〕、眩いばかりで、とても結好(結構)なものです。

朝雨に ぬるゝ木毎の蔭かづら
社の影に もみちしてけり

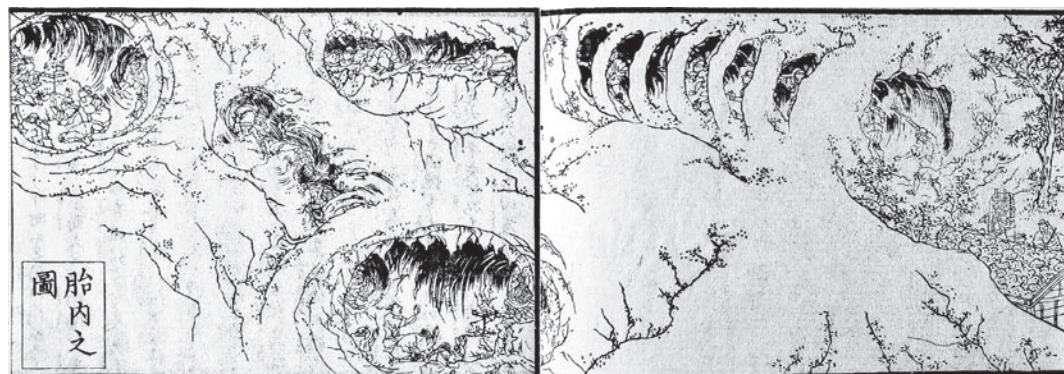
と、詠んでみました。それから、本社の北にある諏訪明神の脇から2、3丁行ったところに、かねてから頼んであった雌馬6疋〔が待っていて、それ〕に分乗し、小雨のそぼ降るススキや並木の小道を小1里ほど行くと、御胎内への分かれ道です。

「ここから〔御胎内へ〕は馬に乗って行く道ではないので、

先廻りして〔お客さん達が〕出てくる道へ馬を待たせておきますから」と馬士が言うので、〔私たちは〕馬から下り、丁度雨もあがったので、雨具も馬士に預けました。

〔馬士と〕分かれて5、6丁行くと、空堀があります。そこをさらに越えると茶屋があり、ここで一服ついて、不要な持ち物をすべて預けてしまいます。

ここから「黒ぼく」のような焼け石の道を7、8丁、そこは角立石の原〔のようなところ、石が尖っているという意味のようです〕ですが、私たちは躓きもせず〔進んで行きます。すると〕、青々とした緑の山の際に出ます。



■「富士山道しるべ」胎内之図

博物館 Report

富士山御師外川家に泊まった人々(中) -『富士の道の記』の紹介-

御胎内の様子【史料5】

ここが御胎内への入口です。そこには「一時的な」小屋掛けがしてあり、2、3人が詰めていて、「蠟燭や腹帯の用意のない方はお求めください」、といいます。「蠟燭は先の茶屋で〔買い求め〕用意しました」と、腹

帯を求める人もいます。

その蠟燭に火を点し、膝にも草鞋を履き〔つけ〕替えて、案内の者を先にして、各々蠟燭を手にとって、いよいよ御胎内に這い入ります。入るとすぐが「あばら穴」で、肋骨のような形

の岩です。そこから弓手〔左〕に曲がり、足と尻を先にして腹ばいになって人の背丈ほど下って行くと、そこからは身を返し、手と膝を使って蛙のような格好で腹ばいで4、5間行き、ようやく身を屈めれば立てるく

らいの広い場所に出ます。ここが「乳の胎内」です。乳房のような岩から雫が落ちる様は、さながら乳が出ているようです。

ここから元に戻って、今度は右の方へ足を先にして這うように下ると、「母の胎内」という「子壺」〔子宮〕を抜け、「子がへり」〔子供に戻る〕という所に出ます。ここも先ほどのように屈めば立てる所です。ここには仏様がまつられており、その仏様を拝んで、這いながら元の小屋の所まで戻ります。慣れた案内人は〔御胎内をくぐっても、身体はおろか〕手さえ濡らさずに戻ってきますが、我々はみな膝・尻・手を汚していますので、手水鉢でこれを洗い落とし、〔ようやく出てきて〕ほっとするばかりです。(このあと、いよいよ馬返しから富士登山が始まります。)

是御胎内への入口には小屋を掛けて、三人居て、「蠟燭・腹帯の用意なくハ求め給ひ」といふに、「ろうそくハ跡の茶屋にて用意もあり」と、腹帯求める人もありて、彼蠟燭に火をとぼし、ひざにワラじをはきかへて、案内のものに先立、てんぐにあかしを持つも、這入ハ直にあばら穴、骨のごとくの形岩也、夫より弓手へ足と尻とを先にして、はらばへながら人尺丈ほど下り、身をかへし、是より手とひざにてかへるのごとくはらばいして四、五軒(間)行ハ、身もやうくにかゞミて立ほどに広し、是乳の胎内といふ、乳のごとくなる岩よりしたる雫ハ、さながら乳の出るに殊(異)ならず、是より元へ帰り、右の方へまた足を先にして這へ下り、先のごとくは行ハ、是母の胎内といふ、子壺をぬけ、子がへりの所、又かゞミてたてり、爰に仏のましまして、拜し終り、元ぐの小家まで這へ登りけり、なれし案内ハ手さへぬらさねば、ミなくハひざ・尻・手などよくれしを、手水鉢にてあらひ捨、ほつといきつく計りなり、(以下略)

■史料5

富士吉田市歴史民俗博物館

FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

ご案内

開館時間／午前9:30～午後5:00(午後4:30迄入館可)

休館日／火曜日(祝日を除く)、

祝日の翌日(日曜・祝日を除く)、年末年始

観覧料／大人 300 円(団体 240 円)

小中高生 150 円(団体 120 円)

交通案内／●中央自動車道河口湖 IC より車で 10 分

●東富士五湖道路山中湖 IC より車で 10 分

●富士急行線富士山駅より山中湖方面バス 15 分、サンパークふじ下車



博物館附属施設

御師 旧外川家住宅のご案内

〒403-0005

山梨県富士吉田市上吉田 3 丁目 14-8

TEL 0555-22-1101

観覧料／大人 100 円(団体 80 円)

小中高生 50 円(団体 40 円)

※博物館・富士山レーダードーム館のチケットで入館できます。

タイトルの「MARUBI」は富士山から流れ出た溶岩台地帯を指すこの地方のことば「丸尾」からとったもので、丸尾とは溶岩が流れ出る様子の「転び」が転化(変化)したものといわれています。

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田 2288-1 TEL 0555-24-2411 FAX 0555-24-4665

博物館ホームページ URL ● <http://www.fy-museum.jp> E-mail ● hakubutsu@city.fujiyoshida.lg.jp

2288-1 KAMIYOSHIDA, FUJIYOSHIDA-SHI, YAMANASHI-KEN 〒403-0005 FUJIYOSHIDA MUSEUM OF LOCAL HISTORY

発行/平成23年10月31日 印刷/K2・ONE